

| | |
|-------------|---|
| Title | 経済學の一部門としての経済學本質論の意義に就て |
| Author(s) | 石川, 興二 |
| Citation | 経済論叢 (1927), 25(4): 275-295 |
| Issue Date | 1927-10-01 |
| URL | http://dx.doi.org/10.14989/128590 |
| Right | |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| Textversion | publisher |

大正四年六月二十一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
經濟論叢 第二十五卷 第四號

田島博士記念論文集
還曆祝賀記

京都帝國大學經濟學會

昭和二年十月一日發行

經濟論叢

第二十五卷第四號

(通卷第四百十八號。禁轉載)

經濟學の一部門としての經濟學

本質論の意義に就て

石 川 興 二

經濟學本質論を經濟學的研究の一部門として確立し且つその經濟學的研究全體に對する意義を明にすることが本論文の眼目であるがそれはやがて經濟學本質論自身に入るべき序説となるべきものである。

經濟學本質論を論ずると云ふことは經濟學的研究に新なる一部門を創設すると云ふことではなくして事實上に於て現に經濟學的研究の一部を成してゐるところのものを正しく基礎付け發展させることであるべきであるが故に先づ經濟學本質論を經濟學上の事實として明にし然る後に於て經濟學的研究の全體に於けるその地位と意義とを明にしたいと思ふ。

一 經濟原論に於ける一般的事實としての

經濟學本質論の研究に就て

經濟學本質論なるものが事實上一般に經濟學的研究の内容とされながら而もそれか經濟學的研究の一部門として未だ十分に意識されてゐないと云ふことは其研究が今日普通に經濟學的研究の他の部門と結んでなされてゐるが爲であると思ふ。即今日普通に「經濟原論」と云はるゝものゝ中には認識的性質を異にする二種のものが含まれてゐるのである。我國にて一般に行はれつゝある經濟原論の著書、例へば田島錦治博士、山崎覺次郎博士、福田徳三博士等のそれに就いて見るも經濟社會を對象とする理論的研究たる理論經濟學の外に經濟の本質、經濟學の定義、經濟學の分類、經濟法則の性質等經濟學そのものゝ本質に關する諸問題が論せられてゐるのである。

斯くの如く經濟學の本質に關する論即經濟學本質論が今日一般に經濟原論の一部をなすに至つたことは經濟學史上に於て最も長き期間に渡つて其發展を續け來つた正統學派(新舊正統學派)經濟學について見れば明に會得されると思ふ。

即經濟學の祖であり正統學派の祖であるアダム・スミスの「富國論」に於てはまだ何等經濟學の本質に關する特別の論がなされてゐない。只だ彼がその著の表題とせし「An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations」なる語はその著の内容に相應する經濟學全般の本質を云ひ表はさんとし努力として看過することが出來ぬものであらう。進んでゼエ・エス・ミル

の「Principles of Political Economy」に至つては「Preliminary remarks」に於て幾分經濟學の

本實に論及して居る。然しそれが顯著になつたのは新正統學派の始祖であり今日英國派經濟學の中心勢力をなせるアルフレッド・マーシャルの名著“Principles of Economics”に至つてゐる。即この著に於ては理論經濟學の外に明に經濟學本質論を論じ全六編の中第一編——四つの章より成る——と更に附録の二つの節とをこれに當てゐる。且其著の問題がロッシヤー等の獨逸風の“Grundlagen”（原論）に相應するものなることを特に注意して居るのである。¹⁾而してロッシヤー、殊にツグナー等獨逸風の經濟原論に於ては理論經濟學の外に經濟學本質論が特に重ぜられて居ることは云ふまでもないことであらう。抑も今日西歐の文明國民中に於て最も哲學的な國民は獨逸人なるが故に經濟學本質論が發達したのも獨逸に於てゐあつて、マーシャルはこの獨逸風の影響の下に經濟學本質論をその經濟原論中に取入れることゝなつたのである。而してこのマーシャルの經濟原論がロッシヤー、ツグナー等の經濟原論と共に今日の經濟原論の研究に廣く影響したことは云ふまでもなからう。かくて我々は今日經濟原論の中に於て一般に經濟學本質論の研究がなされつゝある所以を明に理解し得るのである。獨逸風の經濟學本質論が J. E. Cairns の “The Logical Method of Political Economy” の等によつて代表さるべき在來の英國風の經濟學方法論とその學的本質を異にして居ることに就ては後に述べんとするところである。

上述せしが如く經濟學本質論が今日經濟學的研究の一部として最も廣く研究されつゝあるは經

1) Ibid. 7ed. preface.

濟原論の中に於て、あるがそれ自身獨立の研究も今日經濟學者によつて益々盛になりつゝあるのである。而してその研究の中心が獨逸に於て、あることはまた當然であらう。而して斯くの如く經濟學本質論が理論經濟學より獨立に研究せらるゝか、又はこれと結んで經濟原論として研究せらるゝかは研究の便宜上の問題であつて、こゝには只だ經濟學本質論が今日一般に經濟學研究上の事實となつてゐることが明となればよいのである。

以上私は經濟學本質論を經濟學上の一般的事實として明にしたるが故に次にこの事實を經濟學的研究の一部門として基礎付け (Begründen) なければならぬ。

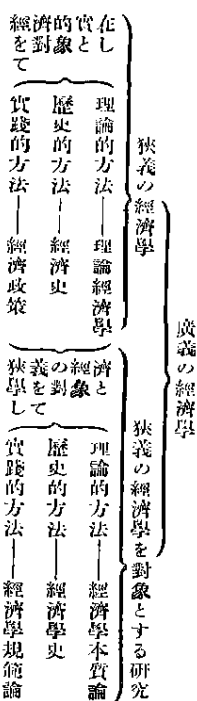
二 經濟學全體系に於ける經濟學本質論の地位

經濟學本質論を經濟學の一部門として基礎付けんとすることは、要するに經濟學全體系に於ける經濟學本質論の地位を決定することであるから、こゝに先づ經濟學の全體系を明にして置くことを要するのである。

學問の體系論には二つの要件が備はつてゐなければならぬ。即ちそれには先づ理論的統一がなくはならない。學問を體系立てると云ふことは之を理論的に統一することだからである。次に其學の事實が重ぜられて居なければならぬ。學問を體系立てると云ふことは新に學問を創設

すると云ふことではなく、事實として存在する學的研究を基礎付け體系付けることであるからである。若しその學の事實を無視して勝手な體系を立てんとするものがあるならば、それはデイルタイの所謂 „die kühnen Architekten, die sie neu bauen wollen.“ (それを新に建設せんとする無鐵法なる建築者) である。私が經濟學本質論の學問的性質を明にせんとするに當つて先づそれを經濟學上の事實として明にして置いたこともこれが爲めである。

斯く理論的統一と經濟學的事實とを重じながら私が立てんとする經濟學的研究全體の體系を今簡單に表示すれば次の如くなるのである。



この内容を十分に説明することは經濟學本質論の本論の問題であつてその序論としての本論文の果し得ないことであるからこゝには經濟學本論の學問的本質を一通り明にし得る程度に於てその説明を止めることとする。

先づこの體系の論理的構造より考察せんに、總て學的認識は或對象をこの對象の本質に基く或

方法によつて研究することによつて成立つものであるから學を根本的に系統立てんとせばその研究對象と研究方法との別によつてなさるべきものである。この經濟學的研究の全體系も研究對象の別とこの對象の本質に基く研究方法の別とにより構造されてゐるものである。

即ち經濟學的研究全體は先づその研究對象の別よりして二大別される、經濟的實在を研究對象とする狹義の經濟學と、この狹義の經濟學をその研究對象とする研究とがそれである。

次にかく二大別されたところのものはその對象の本質に基く研究方法の三種の別よりして、その各が更に三種のものに分たれることゝなるのである。今このことを簡單に説明して見よう。

先づ經濟的實在は全歴史的社會的實在(*die geschichtlich-gesellschaftliche Wirklichkeit*)に於ける經濟的領域を成すものでありまた狹義の經濟學は全歴史的社會的實在に於ける學的領域を成すものであるが故に、さきに大別したる兩種の經濟學の研究對象は共に歴史的社會的實在である。

歴史的社會的實在の何たるやは經濟學本質論の本論に於て詳論さるべき重要な問題であるが、これを一言にして云へば自我と他我との相互關係の上に成立つ意味に於て社會的であり、且つ過去の生を現在の生の中に含むと云ふ意味に於て歴史的なる實在である。而して歴史的社會的實在はその本質上理論的(*theoretisch*)歴史的(*historisch*)實踐的(*praktisch*)の三種の方法によつて研究さるべきものである。このことも經濟學本質論の本論に入つて詳論さるべきものであるが今

これを簡単に説明せんに、歴史的社會的實在は歴史的社會的の生であるが故に個性的の存在である。而して個性的(Einzelheit)の止揚(aufheben)されたものがある(der Einzelheit, als der Reflexion in sonderheit (特殊性)の止揚(aufheben)されたものがある(der Einzelheit, als der Reflexion in sich der Bestimmtheiten der Allgemeinheit und Besonderheit))¹⁾のことは我々が我々自身の生の中に於て常に體驗してゐるところである。即我が自己の性を我に全然特殊なるものと考へ得ずして人間性一般の特殊化として考へねばならぬのは我性の個性的なる所以である。かくて歴史的社會的生命なるものはそれが個性的なるものなるが故にその一面に於て普遍性を有し而してこの普遍性の特殊化として歴史的社會的實在の個性はこれを理解し得るのである。この普遍性を認識せんとする方法が理論的研究方法であり、この普遍性の認識に基いてその個性を理解(verstehen)せんとするのが歴史的研究方法である。かくて歴史的社會的實在の研究に於ける理論的方法と歴史的方法がその對象の本質に即したる二つの研究方法であることは明にされた思ふが、この兩者は歴史的社會的實在を sein (存在)の立場より研究するものである。然るに歴史的社會的實在は更に sollen (規範)の立場より研究されねばならない。即歴史的社會的實在は價值を實現し行くところの發展的生命であつて、我々はそれについて理想を立て、この理想によつてそれが存在を價值批判し、更にこの理想に向ふてその發展を規制し得る本質をもつたものであるが故に社會的歴

1) Hegel; Encyclopadie. heraus. von Lasson. S. 159.

2) この點に關しては個人的精神と社會的精神との關係を深く論ずることを要する。

史的實在は更にこの立場より研究されねばならぬのであつてこれが即實踐的研究方法である。即それはその歴史的社會的實在の理想を定立し、これによつてその實在の狀態を價值批判し、更にこの狀態をこの理想の方向へ發展せしむべき方策(Regel)を研究するものである。かくして理論的研究方法と、歴史的研究方法と、實踐的研究方法と、が歴史的社會的實在の本質に立却せる歴史的社會的實在の三種の研究方法なのである。

かくしてさきに二大別されたる共に歴史的社會的實在を研究對象とする經濟學的研究はこの研究方法の三種の別に基きて各が更に三種に分たるゝことゝなるのである。即歴史的社會的實在を對象とする狹義の經濟學は、經濟的實在を理論的方法によりて研究する理論經濟學、これを歴史的方法によつて研究する經濟史、これを實踐的方法によつて研究する經濟政策とに三分される。狹義の經濟學を對象とする研究も、狹義の經濟學を理論的方法によつて研究する經濟學本質論、これを歴史的方法によつて研究する經濟學史、これを實踐的方法によつて研究する經濟學規範論とに三分されるのである。

以上はこの體系の理論的構造であるが故に次にこの理論的の體系が經濟學上の事實を基礎付けてゐるものであることを明にしなければならぬ。然しこのことも經濟學本質論の本論に入つて初めて詳論し得べきことであるからこゝには只だ簡単に述べて置かうと思ふ。

我々が最も普通に經濟學と云ふ時それが經濟的實在を研究對象とするところのものであることは問題のないことであらう。而してこの經濟的實在を對象とする學に上述の三種の別があることふつとも特に問題のないことであらう。この三種の別は「經濟學の父」と呼ばれるノスミスの「富國論」に於て既に明にされてゐる。即ちその第一篇“Of the causes of improvement in the productive powers of labour, and of the order according to which its produce is naturally distributed among the different ranks of the people.”及び第二編“Of the nature, accumulation, and employment of stock”はその學的本質上大體理論經濟學的研究に、第三編“Of the different progress of opulence in different nations”及び第一編第十一章第三部の後に附せられたる“Digression concerning the variation in the value of silver during the course of the four last centuries.”は學的本質上大體經濟史的研究に、第四篇に於ける經濟的干涉の批判に關する論及び財政について論じたる第五篇はその學的本質上大體實踐的研究に屬すべきものである。

斯くの如く經濟的實在を對象とする研究にこの三種の學的本質のものがあることが明になつたが同時に經濟的實在を研究對象とするものにしてこれ等三種のものごその學的本質を異にせる學的研究を事實上擧げることは困難であらう。但し屢々農業經濟等に於けるが如く同一の對象についてこの三種の研究を一括して一の學として講ずることは便宜上の問題である。

斯くて上に揚げた經濟學の理論的體系が狹義の經濟學に關し經濟學上の事實を基礎付けてゐるものであることは明となつたと思ふが故に、次には狹義の經濟學を對象とする研究についてそれが經濟學上の事實を基礎付けてゐるかを明にねばならぬ。

先づ今日我々が經濟學なる語を廣義に用ふる時に於ては、例へば經濟學者又は經濟學部など、云ふ時には、その意味するところは經濟的實在を研究對象とするこれ等狹義の經濟學に限らないことを注意しなければならない。即ち經濟學史なるもの、研究が經濟的實在を對象とするものでなく、而も事實經濟學的研究として考へられてゐると云ふことは多くの人の認めることであらう。また今日經濟原論として研究さるゝものの中には經濟的實在を對象とする理論經濟學の外に經濟學本質論、云はるべきものが一般に入つてゐることは既に明にしたところである。故に今日經濟學の全體系を立てんとせばこれを狹義の經濟學のみに限することは出来ないものであつて、更にこれ等狹義の經濟學以外の經濟學的研究をもその中に矛盾なく包含する理論的體系を立てねばならないのである。私が上述したところの經濟學の全體系中に於て「狹義の經濟學」の外に、更に「狹義の經濟學自身を對象とする研究」を含め、且つこれをその研究方法の理論的、歴史的、實踐的の別によつて經濟學本質論、經濟學史、經濟學規範論の、三つのものに分つたのはこれが爲めである。然らば、これが經濟學上の事實を果して基礎付けて居るものであるか否かを明にしなければ

ばならない。これが爲には先づ現に經濟學上の事實に於てこれ等三種の學に相應すべきものがあるか否かを明にしよう。

經濟的實在を對象とせず而も經濟學的研究と考へらるゝものにして最も早くより發達し、從つて最も容易に我々に意識さるゝものは經濟學史である、スミスの「富國論」第四篇は“Of the system of political economy”ある題名を有しその中に於ては經濟的自由に關して重商主義及重農主義の學説を論じてゐるのであるからこの點よりこれを經濟學史と考へることが出来るものである。而して經濟學史が經濟學的事實を對象としてこれを歴史的に取扱ふものであることは疑のないところであらう。

次に經濟學本質論が狹義の經濟學に屬せず而も事實經濟學に於て研究されて居ることはさきに明にされたところである。而してこのものは前述せしが如く經濟學の普遍的本質を明にせんとするものであるが故に經濟學的事實を理論的に取扱へるものであることは明であらう。

次に私が經濟學規範論と云へるもの即ち經濟學的事實を實踐的に取扱へるものが事實上あるであらうか。それは在來の英國風の經濟學方法論の研究の中に於て多く見らるゝところのものである。即本來英國風の方法論は獨逸風の方法論と趣を異にするものであつて後者が主として經濟學の本質を問題とするに反して前者は經濟學を研究するに當つて從ふべき方策(Regeln)を主として

問題として居るのである。このことは英國に於ける經濟學方法論の代表的なるものと考へらるゝ J. E. Cairnes の名著 "The Logical Method of Political Economy" を獨逸に於ける經濟學方法論の古典としての Karl Menger の „Untersuchungen über die Methode der sozial Wissenschaften“ に對比するならば明なことであらう。而て今日廣く研究されつゝある經濟統計論なるものは其本質上經濟學研究上の方策の一種として考ふべきものなるが故に經濟學規範論に關する經濟學上の事實として最も顯著なるものと云ふことが出来るであらう。

以上に於て私が狹義の經濟學を對象とする研究として擧げた三種の研究を經濟學上の事實に於て見ることが出来たのであるが、而もこの三種のもの以外に狹義の經濟學を對象とする學的研究の事實を見ることは困難であるから、さきに示した經濟學の理論的體系の中に於て「狹義の經濟學を對象とする研究」に就て述べたところは經濟學上の事實を基礎付けて居るものであることが明にされたのである。

然らば更に進んで經濟的實在及び狹義の經濟學を對象とする研究以外のものにして經濟學的研究と云はるべき學的研究が事實あるであらうか。これは考へ得られないのである。依つてさきに擧げた經濟學の全體系は、經濟學上の事實を理論的に正しく基礎付けてゐるものであることが明にされたのである。斯くてこの經濟學の全體系によつて第一節に於て明にせし經濟學本質論の事

實が經濟學の一部門として理論的に確立されたのである。

三 經濟學的研究に對する經濟學本質論の意義

以上私は經濟學本質論を經濟學の全體系の中に於て經濟學の一部門として確立し得たのであるから更に進んで、經濟學本質論の經濟學の他の部門に對する學的本質の關係を明にし以て經濟學本質論の經濟學的研究全體に對する意義を明にしたいと思ふ。

先づ廣義の經濟學全體の二大別を成すところ「狹義の經濟學」と「狹義の經濟學を對象とするところの研究」どの學的本質の關係を考へるならば、後者は前者の自己反省であること云ふことが出来るであらう。即ち狹義の經濟學が自己を反省するところに「狹義の經濟學を對象とする研究」が成立するのである。

次にこの自己反省の三種の別に相應して、この「狹義の經濟學を對象とする研究」に三種の別を生ずるのである。而してこの三種のもの、學的本質の關係を明にするならば經濟學本質論の學的本質を一層明にし得るであらう。

今自己省察の三種の別の本質的關係を解し易からんが爲めに人間についてこのことを云ふならば、自己が幼時より成長し來れる過去の事實を歴史的に反省して知らんとすることは經濟學史の

それに相應すべきものであり、更に自己の如何なる人間であるかと云ふことを反省し自己の本性を知らんすることは經濟學本質論のそれに相應すべきものであり、更に自己を如何に處すべきかを知らんとすることは經濟學規範論のそれに相應すべきものであらう。

斯くして經濟學本質論は經濟學の自己本質の反省であると云ふことが出来るのである。然るに恰も人間に於けると同様にこの自己本質の反省と云ふことが眞の自己反省なのであり、従つて自己の本質を知つたと云ふことが眞の自覺なのである。即ちたとひ經濟學を歴史的に反省し歴史的に知つても經濟學の本質を知らざる限り未だ眞に經濟學の何たるかを知つたと云ふことは出来ないのである。故にアリストートルも事物の本質(essence)又は實體(substance)と云ふことを深く論じたメタヒイジカに於て、¹⁾ “there is knowledge of each thing only when we know its essence” (如何なるものについてもそのもの、本質を知つた時にのみ我々はそのものを眞に知つたのである)と云ふてゐる。

於茲或事物に就いて何事かを確實に知らんとせば先づそのもの、本質を知らなければならぬのである。即ちそのもの自身の何たるかを知らずしてそのものに就いて何事かを確實に知ると云ふことの不可能なることは殆ど自明のことであらう。故にアリストートルも “substance is first in every sense …… of the other categories none can exist independently, but only substance.”²⁾ (實

1) Aristotle; *Metaphysica*. trans. by Ross. p. 1031b

2) *ibid*. p. 1028a

體は總べての意味に於て第一のものである、他の諸範疇の如何なるものも獨立して存することは出来ない、獨立に存し得るものは實體のみである」と云ふてゐるのであらう。

即我々は經濟學の本質を知つた時初めて眞に經濟學の何たるかを知つたのであり、然らざる以上はまた經濟學に就いて未だ何事も確實に知り得ないのである。斯くして經濟學本質論は總べての經濟學的研究にとつて第一義的意義を有するのである。以下私は經濟學本質論の經濟學の各部門に對する關係を考へつゝ、經濟學本質論が經濟學的研究全體に對して有するこの第一義的意義を明にして見たいと思ふのである。

先づ經濟學本質論の狹義の經濟學に對する關係より考へて見よう。經濟學本質論がその發達の理論的順序よりしては狹義の經濟學に先ちながら而もその發達の時間的順序よりしては狹義の經濟學に遅れる所以は、經濟學本質論の學的本質が經濟學本質の自覺なるが爲である。即ち恰も人間がその幼少の生活を無自覺になしつゝ成長し、成長するに及んで自己の本性を自覺し、自己の本性を自覺するに及んで初めて無自覺なる生活より進んで自覺に基く生活に入るが如く、經濟學もその初めに於ては自己の本性に對する十分なる自覺なくして研究されつゝ成長して行くのであるがそれが成長するに及んで自己の本質を明にするに至ればこゝに初めて眞に自覺的な研究が始ることとなるのである。例へば理論的經濟學なるものもその初めに於ては自己の學問的本質を

十分に自覺せずして研究されてゐるのであるが自己の學的本質が明にされるに及んで初めて自己の本質を自覺した研究に入ることが出来ることゝあるのである。このことは經濟史についても經濟政策についても同様である。而してこゝに特に重せねばならぬことはこの自覺的なる研究が初めて眞に學的なる研究であると云ふことである。

抑も文化諸域中に於ける學的領域を一貫する根本原理は Der Satz von Grunde であり學的根據を求めて止まない精神にあるのである。故に總て學的域領に屬してゐるものは一小命題に至るまで、常に學的根據に立つて居なければならぬのであつて、このことは經濟學に於ても勿論同様である。例へば經濟原論の中に於ける一小研究と云へども經濟原論の正しき本質の自覺の上に打立てられてゐなければならぬのである。而して經濟原論の正しき本質の自覺は經濟學全般の正しき本質の自覺の上に打ち立てられて居て初めて可能なのである。このことは經濟史及經濟政策の正しき研究に就いても同様である。故に正しき經濟學の研究はその全體が正しき經濟學本質論に基礎付けられたる一大體系を形成して居らねばならぬのである。即ち經濟學の範圍に於ける如何なる研究と雖もその最後の根柢に於て經濟學本質論に基礎付けられて居らぬものは學としては *unwissenschaftlich* 無根據なるものであり従つてそれはむしろ常識的なものと云はざるを得ない、而してこの本質論の正しき時に於てその學的研究は初めて十分に正しくあり得るのである。

斯くして眞に學的なる經濟學の研究は正しき經濟學本質論を待つてのみ初めて可能となるのであり従つて經濟學本質論の確立する程、今日尙多く無自覺でありそれ故に常識的である經濟學研究は眞に學的なるものに進み得ることゝなるのである。

以上私は經濟學本質論の發達が狹義の經濟學の發達の爲めに重要なことを明にしたのであるが、更に逆に經濟學自身の發達が經濟學本質論の發達に對して有する意義を看過してはならぬ。これ經濟學本質論は經濟學の本質の反省であり従つて反省さるべき經濟學自身がより高き發達を果けてゐる程その學的本質の反省はより深くなり得るからである。それは恰も自己の成長する程自己の本質をより深く反省し得ると同様である。經濟學自身の相當の發達を待つて初めて經濟學本質論の發達を見得た所以もこゝにあるのである。斯くてこの兩者の發達は相互關係にあるものであると云はねばならぬ。

このことに關連して特に注意すべきことは往々人々が經濟學の本質なるものは本來哲學者の明にすべきものであつて經濟學者の本來問題とすべきところのものでないと思ふことが誤りであつてむしろ經濟學本質の研究は經濟學者自身の研究によつて初めて十分になし得ると云ふことである。何となれば總て事物の本質を明にせんとすることはそのものに關する自己の體驗を反省することによつて初めて可能なのであるが故に、經濟學の本質を明にせんとするものはまた經濟學

自體について十分なる體驗を有してゐなければならぬ。而も經濟學自身につき十分なる體驗を有すると云ふことは經濟學の研究者自身に於て初めて十分に望まらるべきことなのである。而して哲學者はむしろ各文化學科著の研究の結果を綜合して文化科學一般の本質を明にし以て間接に經濟學本質論に寄與したのであつたのである。即經濟學者が自己の經濟學的體驗を反省して經濟學の本質を明にすることは、哲學者のかゝる研究に助をかりて、初めて十分なるを得るが爲である。事實今日に至るまで事實上または理論上に於て經濟學の本質論に直接又は間接に功獻せし人は古くはスミス、マルクス等にしろ近くはカール・メンガー、マックス・ウェバー等にしろ、皆哲學の素養ある經濟學者であつたのである。

以上は經濟學本質論を狹義の經濟學との關係に於て考へたのであるから次に經濟學史との關係に於て考へて見よう經濟學本質論が發達の時間的順序に於て經濟學史に遅るゝ所以は恰も人間に於て自己本性の反省をなすことは自己の歴史的反省をすることよりもより高度なる意識の發達を待つて初めて可能なることであり従つてこれに遅るゝと同様である。然し發達の理論的順序より見るならばこれとは異なるのである。即ち經濟學史は經濟學的事實を對象としてこれを歴史的に研究するものであるが、總て對象の根本的な研究方法はその對象の本質的構造に即したものでなくてはならない而してこの對象たる經濟學の本質的構造を明にするものは即ち經濟學本質論で

あるが故に經濟學史研究の十分なる發達は經濟學本質論の發達に待たなければならないのである。

而もまた經濟學本質論は經濟學的事實の自己本質の反省であり自覺であるが故に、經濟學史の研究の發達によつて經濟學的事實が明にされる程また經濟學本質論は發達するのである。かくて兩者の關係は相寄り相助くべきものであるが故に經濟學本質論の本論に於ても經濟學史的研究は絶へず省みられなければならないところのものなのである。

次に經濟學本質論の經濟學規範論に對する關係を見よう。經濟學規範論は經濟政策が實踐的方法をもつて經濟的實在に對するが如く實踐的方法をもつて經濟學的事實に對するものである。故に經濟政策に於て經濟的實在の理想を確立しこの理想をもつて經濟的實在を價值批判し更に經濟的實在を理想に適する狀態に如何にして導くべきかの方策を研究するものであるが如く經濟學規範論は經濟學の理想を明にしこの理想をもつて經濟學的事實を價值批判し更に經濟學的事實をこの理想の狀態に導くべき方策を統一的に論せんとするものである。故に經濟學本質論と經濟學規範論とは其學的本質を異にするものであるが然し經濟學的事實のかゝる實踐的研究が可能ならんが爲めにはその根柢に於て經濟學自身の本質が明にされてゐなければならぬ。それは恰も人間の本質の如何なるものであるかを明にして初めて人間は如何に行動すべきかの規範を知り得ると

同様である。然るに、經濟學自身の本質は經濟學本質論がこれを明にせんとするところであるが故に經濟學本質論は經濟學規範論の土臺をなすものであり従つて經濟學規範論の發達は經濟學本質論の發達に待つべきものである。經濟學規範論の發達が經濟學本質論の發達より遅れてゐる所以もこの點にあるのである。

この兩者の關係は、極めて緊密なるものであつて、恰も人間の本質はかくかくのものであると云ふ本質的命題が人間はかくせざるべからずと云ふ規範的命題を伴ふが如くに經濟學本質論の命題はやがて經濟學規範論の内容に發展する性質をもつてゐるのである。例へば理論經濟學の本質はかくかくであると言ふことはやがて理論經濟學の研究に就いてその理想及方策を規定することとなるのである。而も經濟學本質論の命題は斯くの如くそれが經濟學規範論に發展することによつて自己の意義を一層明にすることが出来るのである。かゝるが故にこの兩者は今日普通に結んで考察されて居るのである。

經濟學規範論は今日尙ほその體系が最も不十分なものであるが、正しき經濟學基本論が土臺となつて確立されたる經濟學規範論が經濟學の理想的なる研究に功獻することの少なからざることには云ふまでもなからう。

以上に於て私は經濟學本質論を經濟學の一部門として確立し且つそれが經濟學全體の眞に學的な研究に對して有する第一義的を論じ、以て經濟學本質論の學的本質を明にすることに務めたのである。

更に進んで、然らば經濟學の本質は如何にしてこれを論明し得るやと云ふ問題を考へて見ねばならぬと思ふのであるが、これは別に機を改めて論することゝしよう。(了)